

禪 現代に生きるもの

紀野一義



NHKブックス

禅

現代に生きるもの

紀野一義



NHK **ワタス**

紀野一義 (きの・かずよし)

1922年 山口県萩市に生まれる

1948年 東京大学印度哲学科卒業

昭和42年4月第1回仏教伝道文化賞受賞 真如会主幹

著書 「法華経の探求」「訳註般若心経・金剛般若経」「訳註浄土三部経」「いのちの世界」「遍歴放浪の世界」「業の花びら」「永遠への愛」「現代に生きる仏教(三部作)」「永遠のいのち一日蓮一」(共著)など

現住所 東京都狛江市猪方1047-174

NHKブックス 35

定価 750円

禅—現代に生きるもの

昭和41年1月20日 第1刷発行

昭和58年11月1日 第59刷発行

〈検印廃止〉 著者 紀野一義

発行者 藤根井和夫

印刷 理想社

製本 三森製本

装幀 柄折久美子

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町41-1

郵便番号150 振替東京1-49701

落丁・乱丁本はお取替えいたします



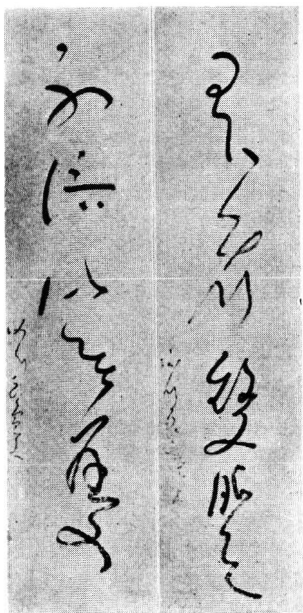
夢窓疎石像（無等周位筆） 京都 相国寺藏 14世紀

大燈國師像（白隱筆）



君看双眼色
不語似無憂

（良寬筆）



菩薩立像（頭部）——伝虚空藏 七世紀
奈良 法輪寺
角川版世界美術全集より



は し が き

この本の標題を見て、どうお考えになったか知らぬが、この本は坐禅の入門書や案内書ではない。わたしはそういう種類の本を書く適任者ではないし、そういう本を書けということなら、わたしは言下におことわりしただろう。わたしは坐禅の専門家ではないのだから。

この本は、仏教については常識程度の予備知識しかなく、ましてや、禅の世界などほんどのぞいて見たこともない人たちに、禅や仏教の本質についてもっとくわしく知りたいという気を起こすような本を書いてもらいたいという、編集部依頼によって書かれたものである。

執筆にあたってわたしはこんなことを考えた。禅は、坐禅の専門家の独占物ではない。仏教のはじまる以前からすでに禅はあったといつてよい。今日、禅者といえば、坐禅によってすぐれた精神的境地に到達した人を指すことばになっているが、坐禅によらず、念仏行や唱題行、あるいは自分の仕事に打ちこむことによって坐禅者に勝るとも劣らぬ境地に入った人は沢山いる。その人たちのことも禅者と呼んでなら差支えはあるまい、と。

たしかに坐禅者にはすぐれた人が沢山おられる。同時に、坐禅者の中には鼻持ちならぬ人間もまた沢山いる。わたしは、同じく坐禅に精進しているのにどうしてこんな違いが出て来るの

かと不思議に思った。そして、その両者の違いに眼を向けて、その原因を究明したこともある。その原因の一つは、坐禪が禪のひとつの方法にすぎぬことを忘れてのことにある。坐禪至上主義、坐禪絶対主義が、思いつた偏狭な人間を作り上げてしまっているのではないか。

正しい師家のもとで、正しい坐禪の訓練を受けた坐禪者の中にはそんな者はひとりも居らぬはずであるが、なかなかそうも行かぬ。みごとに出来上ってほればれするような坐禪者が多い中に、時折、鬼子のごとき者を見るのはなほだ遺憾なことといわねばならぬ。

道元が宋の国から帰朝して来たときに、「あなたはかの地で何を学んで来られたか」と問うた者がある。そのとき道元は、「柔軟心を学んで来ただけである」と答えた。柔軟心なき坐禪者は禪者にあらずというべきか。

その柔軟心はどうして得られるか。柔軟心とは、あるときは「柔和質直^{しつじき}」であり、あるときは「素朴」、あるときは「臨機応変」、あるときは「豪毅果斷」であるだろう。それがどうして得られるかという問題を解決するときにおつかつて来たのが、第二章の「沈黙と禪」と、第三章の「色即是空 空即是色」であった。

第四章に「唐時代の巨匠たち」をとり上げたのは、坐禪者であって、しかも禪者である典型的な人々がすべて唐代の禪僧であったからである。わたしは、坐禪する者はすべて、唐代の巨匠たちのあののびのびとした、大らかな心のひらけ方に学ばねばならぬと思っている。それ故に特に一章を設けたのである。第五章には坐禪者でない禪者、たとえば空也上人や一遍上人のような人々を入れるべきであったが、坐禪者を中心にして禪というものを考え直してみようと

いう執筆方針から、こういう顔ぶれになった。

第六章では禅精神が日本の文化に及ぼした影響の一端を眺めてみた。なお加えるべきものが多々あるが、ひとつのまとまりをあたえるためにこういうかたちの章になった。

専門語を使わず、平易な日常語で、平易な事実で、禅の世界を紹介するという意図がどれだけ達せられたかはなほ疑問であるし、第一章で言及した密教的などす黒さとの対比にまでふれられなかったのは残念であるが、とにかく本書を読んで禅の世界に少しでも興味を持たれた方は、進んで坐禅し、仏教書・禅書を読み、それを日常生活の中に生かして行かれるようお願いする。

本書の執筆にあたっては熊谷健二郎氏にお世話になった。深く感謝の意を表する。

昭和四十一年一月

紀 野 一 義

目次

第一章 坐禪と禪	二
----------------	---

無明の中うごめくもの
空くうしさと空くうと歳月

第二章 沈黙と禪	三
----------------	---

沈黙の世界

沈黙と寂

ことばは杭の如く突っ立つ

いのちの賭け

リルケの詩

鳥の歌うが如く

永遠えいゑんにつながる話

底抜け

第三章 色即是空 空即是色……………五

虚空を遍歷するような人生

むなしさと仏のいのち

死ねば仏のいのちに帰る

徒勞に賭けるいのち

夏の夜の怪異

君看よ双眼の色語らざれば憂いなきに似たり

無限の桃花水を逐うて流る

命二つの中に生^{いき}たる桜かな

結語

第四章 唐時代の巨匠たち……………七

大悲の風動く―六祖慧能―

心は虚空のごとし―馬祖道一―

柄が何になる―石頭希遷―

高^{たか}高^{たか}たる山上に向って立ち―薬山惟儼―
深深たる海底に行くべし

願わくは婆婆の永えに——趙州從諗——
苦海に沈まんことを

独坐大雄峯——百丈懷海——

凜々たる孤風——黃檗希運——

豪放惡辣な臨濟將軍の風——臨濟義玄——

父母未生已前の汝——潞山靈祐——

道い得るも三十棒——徳山宣鑑——

道い得ざるも三十棒——

第五章

日本の禪匠たち……………

一九

父母の縁尽きなば——夢窓国師——

学道の人貧なるべし——道元禪師——

死してなお師のかたわらを去らず——孤雲懷奘——

漆黒の暗夜に悟る——一休宗純(一)——

雀を葬る一休——一休宗純(二)——

ただ土になりて念仏修行せらるべし——鈴木正三——

仏にならぬが仏——至道無難禪師——

仏が喜び仏が呼ぶ——盤珪禪師——

南無地獄大菩薩——白隠禪師——

第六章 禅と文化……………二〇七

仙桂和尚は真の道者——良寛和尚——

山岡鉄舟の真面目

終戦の詔勅と玄峰老師——山本玄峰——

花を見て花を見ず

墨絵の世界

茶道と能と一休

桑山左近の露地庭と慈光院

無茶という茶

無法と宗教と芸術

松平不昧公の慎独

井伊直弼の独座観念

第一章 坐禪と禪



草坐遠磨像（白隠）

無明むみょうの中うちにうち

こめくもの

現代の日本人の心理の中には、こういうものだと言ふに割り切つてしまふな
い複雑なものがうごめいている。歌い、喚き、踊り狂つてゐる若者があるか
と思へば、政治運動に躍起となる若者もある。居士林じしりんで明けても暮れても坐
禅ぜんしてゐる若者もある。そのひとりひとりは、それなりに割り切つてゐるつもりかも知れぬ。

しかし、人間は、こうだと割り切つてしまふことなど到底できぬ存在である。坐禅ぜんしてゐる静
かな若者の心の奥底に本人さえも意識できない烈しい欲望の火があるかも知れぬ。踊り狂つて
ゐる若者の心の奥底に、静かな永遠な愛への憧れが芽生えてゐるかも知れぬ。そんなものはな
いと、誰が断言できるか。悟り澄ました僧や敬虔な牧師の胸の底に、本人も気づかぬ愛の渇き
があるかも知れぬ。無頼で野卑な男の胸の底に、本人も気づかぬ可憐な戦きがあるかも知れ
ぬ。ないとはいへぬ。誰がそれを否定できよう。意識で捉えられぬ深層の意識を、誰が明らか
にし得よう。

それを明らかにできないで、人間はこのやうなものであると分類し判断することが誰にでき
るであらうか。

人間のいのちの奥の方には、意識によつて制御することのできない暗い衝動、あるいは盲目
的な動きがある。それは、「煩惱」といふやうなことで表現できないものかである。

「無明むみょう」といへばそれに一番近いであらうか。いや、「無明」という他はないかも知れぬ。ただ
無明むみょうというとき、「無明の闇」などといつて、忌まわしいもの、いやなものをすぐに連想し、無
明の闇を破るなどと、あつさりかたづけられるので、なるべくならそういうことばを使いたく

ないのである。無明の闇がそうあつさり破れてたまるかとおたしは思う。しかし、この際適當なことばが見当らぬので、仕方がないから「無明」を使うことにしよう。この「無明」は、いわゆる仏教術語のひとつである無明とは別のものと一応考えてほしい。無明は人間のいのちの底に燃える、根源のないのちの炎である。それはしかし、人間の意識でとらえたり、感覚で感じたりできぬものであるから無明なのである。

それは禅僧のよくいう「無」である。禅僧は、意識を完全に制御し、自我が全く無くなったときに、「無」が現成する^{げんじょう}という。さとした人はこの「無」をさとするのである。そしてそれを象徴的に表現する。短いことばや、絵や、庭などにそれが表わされる。明るいもの、汚れのないもの、まっすぐなもの、単純なものとしてそれを表現する。

しかし、この根源のないのちの炎をとり扱う宗教は禅宗だけではない。天台や真言の密教はもっと直接的にそれを表現しようとする。さとした人が象徴的にそれを表現しようとした禅とは反対に、誰の眼にもそのように映ったその通りに表現しようとしたのが密教である。そこでは分りにくいことば、秘密の真言、複雑な絵、複雑な表象、暗い炎、暗黒の内陣などでそれが表わされる。暗いもの、恐ろしいもの、わけの分らぬもの、曲りくねったもの、複雑多彩なものとしてそれを表現するのである。

さて、そのいずれが日本人の心に訴える力が大きいかといえば、それはむしろ後者である。日本人は簡素清潔を重んずるから、もちろん禅的なものの方が訴える力が大きいように思われるであろうが、事実はずしもそうでない。たしかに日本人の中である種の人たちは、禅的な

ものを好み、自らもそうした生活をしているように見えるが、ほんとうは、片方に密教的な豊饒さ、複雑さ、どす黒さをちゃんと持っていて、その余暇に、その息抜きに禪的な簡素さを求めるといったタイプの人がまことに多い。豪壮な邸宅の一隅に茶室を設け、デラックスな生活のあい間に坐禅するという類いである。茶の湯の代表者として有名な利休は、小さな藁小屋で簡素な敬清寂だけの生活を送ったであろうか。断じて否。かれほど金銭や名譽や豪奢を重んじ、その力を自在に駆使した怪物はまれである。その道の代表者秀吉でさえ、ついにかれを殺さざるを得なくなったほど、利休はどす黒い大きな力であった。いわばかれは密教的なものである一面の代表者でもあったのである。

こういう密教的な面に対する日本人の傾斜を無視して、禪のみを称揚することはできない。もし日本人が、われわれが單純にそう思い込んでるように古淡簡素閑寂を好む民族であるなら、禪宗寺院はいつの時代でも大入満員の盛況を呈していたであろう。しかし、事實はそうではない。禪宗寺院は、觀光寺院は別として、昔も今も依然として閑寂である。そして、浅草寺のようなお寺には、どういう信仰かは知らぬが、日によつては足の踏み場もないほどの人が押しかけるのである。会社の練成で禪宗寺院が多忙をきわめるといふ現象がよく見られるが、それで禪が盛んであると考えるとしたら、それは少々考え違いといふものである。

それにどうも、今の坐禪者にはエリート的要素が多すぎる。坐禪せんような奴は仏教者ではないと広言したり、坐禪する者のあいだでは旧參の者に独得の修行者意識があったり、古録については門外漢のいうことは問題にならぬと言ったりする。こんな風では、ますます大衆は禪